



聖路加国際大学シンポジウムに参加

27名が来日し、1年目は17日、2年目は20日、3年目は29日、及び3年目は18年6月27日から7月6日、10か国1地域、27名の研修生が来日した。アジア諸国と協力関係を強化し、強固な感染症対策ネットワークを構築していくために、感染症疫学研究の最前線に位置するアジア地域の若手研究者が、

の知見や経験について情報共有を行うとともに、相互の分析結果について深くディスカッションすることが必要であるというコンセプトのもと、1年目は「感染症分子疫学」をテーマに研修を開催し、ベトナム、タイ、シンガポール、韓国、台湾から9名を、2年目は「院内感染と疫学」をテーマに開催し、韓国、フィリピン、インドネシア、ベトナム、カンボジア、シンガポールから10名を、最終年度である3年目は、「生物統計」をテーマに開催し、モンゴル、タイ、ミャンマー、台湾から8名を招へいし、アジア21か国、1地域のうち、10か国からの研究者を招へいた。これらの研修は、国内外で活躍している著名な疫学研究者からの指導により行われ、日本の実地疫学専門家養成コース(Field Epidemiology Training Program: FETP)に所属する若手研究者等とともに受講し、活発な意見交換がなされていた。更に、両者の交流を図るため、当該分野に関するシンポジウムやワークショップを開催し、研究者間の交流を図った。これらのプログラムにより、アジア地域の感染症疫学研究を行っている若手研究者とのネットワークが構築された。また、本プログラムでは、自治体における

1. プログラムの成果
 聖路加国際大学及び国立感染症研究所は、アジア地域における研究者ネットワークを構築し、将来に渡ってアジアの感染症対策に資することをめざし、さくらサイエンスプラザ交流事業によりアジア諸国で感染症対策に当たる若手研究者を3カ年計画で招へいた。当招へい対象者は主に感染症疫学の分野で研究を行い、各国の実地疫学専門家養成コース(Field Epidemiology Training Program: FETP)の研修生や修士とした。1年目は2017年1月11日から20日、2年目は17年9月20日から29日、及び3年目は18年6月



遠藤弘良
 (聖路加国際大学公衆衛生大学院研究科長)

聖路加国際大学の活動報告

II 特別シリーズ II

科学技術
 振興機構

『さくらサイエンスプラン』友情と感激

第164回

プログラム	
1日目	来日
2日目	オリエンテーション(事務局紹介、プログラム説明、事務手続き、写真撮影) 聖路加国際病院見学 シンポジウム(1日目) 日本のFETP設立と健康危機管理について
3日目	シンポジウム(2日目) 国内外の健康危機管理事例に対する実地疫学調査 地方衛生研究所訪問
4日目	日本科学未来館見学、課外活動
5日目	自由行動
6日目	生物統計セミナー(1日目) Descriptive Statistics, Probability ウェルカムパーティー
7日目	生物統計セミナー(2日目) Normal Distribution, Confidence Interval
8日目	生物統計セミナー(3日目) Test of Hypothesis, Paired samples
9日目	生物統計セミナー(4日目) Logistic Regression, Survival Analysis
10日目	まとめ、離日



感染研の生物統計学セミナーに参加



川崎市衛生研究所にて



感染研での修了証贈呈式



感染研の書道イベントにも参加

本事業を通して構築された各国の若手研究者(FETP)同士のネットワークが感染症疫学に関する共同研究や情報共有を促進し、日本を含め参加各国、地域における感染症対策の一つの有用なツールとして活用されることが期待される。

2. 今後の展望

アジア地域は社会経済的な状況が多様であり、各国によってその発展段階が異なることで、感染症について抱える問題も異なるものと考えられるが、さらさらサイエンスプラットフォームで構築された若手研究者(FETP)のネットワークは各国、そしてアジアにおける感染症対策に必要な情報共有とチームワーク、信頼感を成熟することに大いに寄与した。

感染症対策の現場となる地方衛生研究所の見学を行った。これは、我が国の感染症対策における科学技術の活用を知ることに直結するものであり、各国の参加者に感染症への対応の具体事例を示すことができた。聖路加国際大学では公衆衛生大学院の教員とともに「数理モデルと感染症」の講義を行うとともに、聖路加国際病院においては、我が国の最先端の検査診断技術や治療の見学を行った。これらのプログラムを通じ自国の感染症対策を振り返るきっかけになったと思われる。日本科学未来館においては、感染症分野を含む我が国の優れた科学技術を見学ならびに実際に体験できることから、我が国の最先端の科学技術に対する、招聘者の理解ならびに関心を促進する貴重な機会につながった。

3年間FETPという各国においてアウトブレイク対応などの感染症対策において最前線に対応する役割を担う若手研究者同士が、ディスカッションや意見交換、グループワークを実施することによって、各国の状況は異なるものだが、感染症疫学における共通の課題を共有できたことは大きな成果であった。また滞在期間中、研修、シンポジウム、施設見学の文化の紹介があり、日本からも書道の実演やたこ焼きを振る舞うなど、文化的な交流を行い、お互いの国の理解も深まり、研修終了後も情報交換は続いている。さらに、国際学会や会議において再会する機会などがあり交流を深めるとともに、お互いの活躍を糧に切磋琢磨している。